

〔書評〕

河崎靖 著

『ボンヘッファーを読む ドイツ語原典でたどる、
ナチスに抵抗した神学者の軌跡』

現代書館、2015年

細川裕史

現代の日本において、書店の「ドイツ(史)」の棚に占めるナチス関連書籍の割合には、目をみはるものがある。とりわけ、第二次世界大戦終結70周年だった2015年前後には、ナチス関連の書籍が目についた。メディア史やドイツ語史の分野からナチス時代にアプローチした研究書では、しばしば、詳細な調査を通じて、「ことばの魔力によって国民を扇動したナチス」という「神話」の解体が試みられている。この「神話」は、ヒトラーの著書『我が闘争』(1925/26)にその萌芽がみられ、ナチス政権下においては国民啓蒙宣伝省によって自らの業績として喧伝された。そして、戦後は、ジャーナリストや学者によって、戦争責任をナチスのみに押しつけるための免罪符として繰り返し主張されてきた。この「神話」は、しかし、研究者たちの努力にも関わらず、今日でも多くの信奉者を得ている。実際に、一般読者向けのナチス関連の書籍には、たとえば、「ヒトラーのことばの魔力」だとか「プロパガンダの天才ゲッベルス」といったように、ナチス幹部やその関係者たちについての使い古されたイメージが再録され、その普及に一役買っているものが多くある。

河崎靖氏の『ボンヘッファーを読む』は、ディートリッヒ・ボンヘッファー(Dietrich Bonhoeffer, 1906-1945)の生涯とその思想とを、彼自身のことばを通じて紹介しようとする。このボンヘッファーについても、ヒトラーを爆弾で暗殺しようとした「7月20日事件」に関与し

た人物として触れられることが多いため、本書で述べられているように「牧師(聖職者)でありながら、ヒトラー暗殺を企図した人物」というイメージのみが広まっていると言えるだろう。こうした状況に対し、著者は、序文において「ボンヘッファーは単にナチスへの抵抗者としてのみ限定して考えるべき人物ではありません」と断じ、「特別な時代の、例外的な問題に向き合った人物」という限定的な彼のイメージを拒絶する。そして、著者自身は、ボンヘッファーについては日本語で読める文献が十分あるとしたうえで、本書を「彼自身が残したことばを原典であるドイツ語で辿りながら、彼の思想と行動について詳らかにする目的で」書いたと述べている。本書は、ボンヘッファー自身のことばに触れさせることで、多くのナチス関連書籍が再生産しつづける限定的なイメージについて検討する機会を提供しようとしている、とも言えるだろう。

本書の第1部では、ボンヘッファーの生涯を、彼自身のことばを交えながら、もっぱら1930年代に焦点をあてて紹介し、第2部では、彼の思想を伝えていると著者が判断したテキスト(著作や説教からの抜粋)がそれぞれ1ページ強ずつ紹介されている。第1部では、まず、「マタイによる福音書」がきっかけでナチズムとの戦いを決意したことやアメリカへの留学で黒人への人種差別問題に接したことなどが述べられる。続いて、ナチス政権下において、聖書

や神学の研究に没頭するのではなくアクチュアルな問題に取り組むボンヘッファーの姿、とりわけ「告白教会」での活動が描かれ、最後に、ヒトラー暗殺計画に加わることになった彼の心境を表すテキストが紹介される。第2部では、ボンヘッファーの著作『抵抗と信徒』、『誘惑』、『共に生きる生活』、そして、説教と詩がとりあげられている。いずれの場合も、専門用語を避けた易しく分かりやすいことばで豊富な解説や注がつけられており、ボンヘッファーのことばに親しむ助けとなっている。

神学者ボンヘッファーの思想までも「ひととおりのドイツ語入門を終え、初級の学習を経験した方には十分にご理解いただけるよう工夫」という本書は、すこし変わった構成をしている。それぞれの章(本書では「講」と呼ばれる)には、まず、紹介されるドイツ語のテキストに関連した導入のための年表や解説文(どういう時代背景があり、どのような文脈で書かれたテキストなのか)があり、ドイツ語のテキスト(ボンヘッファーのことば)、続いてドイツ語の文法や語彙に関する「注釈」、さらにテキスト全文の日本語訳があり、章によっては最後に結びの文が置かれている。したがって、あるていどドイツ語力のある読者は、自らの力だけでボンヘッファーのことばを味わい、彼の生涯や思想に想いをめぐらせることができるし、それが難しければ、文法や語彙についてヒントをもらいながらボンヘッファーのことばに触れることもできる、という仕組みになっているのだ。なるべく多くの読者にボンヘッファーのことばを直接伝えたい、という著者の熱意が感じられる構成であり、内容が内容だけに、聖書を翻訳した際のマルティン・ルターの努力に通じるものを感じる。わざわざ手をかけてこうした工夫をほどこしているのだから、原典のすぐそばに全文訳を置いてオリジナルの余韻を消してしまうのは、もったいないようにさえ思われる。全文訳は巻末注に回しても良かったのではないだろうか。

本書の良い点でもあり悪い点でもあると感じられたのは、豊富なドイツ語のテキストが含まれていることである。ボンヘッファー自身のことばが豊富に記載されていることに関しては、彼のことばに触れる機会をより多く提供しているのだから好意的に評価できる。しかし、聖書(「マタイによる福音書」など)やボンヘッファーの弟子が書いた伝記、さらにはナチス関連の書籍(「アリア人種条項」についてなど)の一節が、ドイツ語(あるいは英語)による原文で記載されている箇所が少なからずある。おそらく、これらのテキストの日本語訳だけでなく原文にも触れなければボンヘッファーの生涯と思想に近づけない、という判断なのだろうが、これらの書籍からの引用が混ざること、ボンヘッファーのことばを味わうという本書の目的が阻害される可能性があるのではないだろうか(とりわけ、巻末注にはドイツ語のテキストと出典しか記載されていない場合もあり、ボンヘッファーのことばなのか他者のことばなのか、判断しかねる箇所がある)。

本書を通じて、ボンヘッファーのイメージではなくボンヘッファー自身に触れたあと、「牧師(聖職者)でありながら、ヒトラー暗殺を企図した人物」という限定的なイメージが改められるのか再確認されるだけなのかは、個々の読者次第である。いずれにせよ、ボンヘッファーに烙印づけられたイメージについて読者自身が検討できるように、本書は、彼自身のことばを豊富な解説つきで読者に提供しており、とかく限定的なイメージだけが流布されがちなナチス時代の人物に読者自身が直接触れることができる、という点だけでも高く評価できる。また、副次的なことではあるが、本書のような「工夫」がされた書籍を通じて、ドイツ語学習者が教室で「ドイツ語を読む」だけでなく、自分の関心対象について「ドイツ語で読む」という経験をつめる、という点にも価値が見いだせるだろう。

(2016年11月18日掲載決定)